ローマ字入力とローマ字教育
- 二者の間の接点に注目して -

長澤直子*1
Email: nagasawa@osaka-seikei.ac.jp

*1： 大阪成蹊短期大学経営会計学科

◎Key Words ローマ字入力，ローマ字教育，JIS キーボード，タッチタイピング

1. はじめに

筆者は、短期大学において情報リテラシー関連の科目を担当しているが、学生がキーボードでローマ字入力をしているのを観察していると、拗音の表現に困っている様子がしばしば見受けられる。また、無駄に打鍵数の多くなる綴りを選択していたり、タッチタイピングの際にわざわざ動かしにくい指を使った綴りを選択していたりすることに気が付く。

キーボードでの文字入力や、タッチタイピングに関して研究されている論文では、入力速度や練習方法に関するものが数多く発表されているが、ローマ字入力における綴りの選択に関しては先行研究が見当たらなかった。

そこで、短期大学の学生を対象として、ローマ字入力時の綴り選択に関する調査を実施することにした。

2. ローマ字教育の現状

小学校の国語科教科書におけるローマ字教育は、図 1 のような内容が中心になっている。

ローマ字

	大文字	A ア段↓	I イ段↓	U	E	O			
ア行→		あ a	い i	う u	え e	お o			
カ行→	K	か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko	きゃ kya	きゅ kyu	きょ kyo
	S	さ sa	し si [shi]	す su	せ se	そ so	しゃ sya [sha]	しゅ syu [shu]	しょ syo [sho]
	T	た ta	ち ti [chi]	つ tu [tsu]	て te	と to	ちゃ tya [cha]	ちゅ tyu [chu]	ちょ tyo [cho]
	N	な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no	にゃ nya	にゅ nyu	にょ nyo
	H	は ha	ひ hi	ふ hu [fu]	へ he	ほ ho	ひゃ hya	ひゅ hyu	ひょ hyo

図 1 小学校国語科教科書におけるローマ字表
（光村図書 国語 四 上「かがやき」より一部抜粋）

訓令式がメインで、ヘボン式も併記された形だが、拗音の表記が「きゃきゅきょ」「しゃしゅしょ」「ちゃちゅちょ」等、3 音しか表記されていない。一方、ローマ字入力用の綴りにおいては、「きゃきぃきゅきぇきょ」「しゃしぃしゅしぇしょ」「ちゃちぃちゅちぇちょ」など、5 音分用意されている。また、小学校国語科の教科書には記載されない「てゃてぃてゅてぇてょ」などの音も存在する。

この、小学校国語科で扱われていない特殊な綴りに関して学ぶ機会があるとすれば、中学校の技術・家庭科か、高等学校の情報科になると考えられる。なければ、知識が欠落していることが考えられる。

3. ローマ字入力の綴り調査

ローマ字入力をする際に、どのような綴りを採用しているかということについて、2011 年 4 月および 7 月に、短期大学の学生 46 名を対象とした調査を行った。

まず、4 月の入学直後に一度調査を行った。その後、前期授業期間に、ローマ字入力のためのローマ字対応表を渡し、タッチタイピング習得用ドリルにおける実習にてローマ字対応表にあるすべての音を網羅した練習を行った。そして、7 月最終授業日に再度調査を行うことで、4 月時点と 7 月時点での間に綴りの差異が認められるかどうかを確認した。

3.1 調査方法

Web の画面上にフォームを設置し、短文を 4 つ記載して、その文章をローマ字でどう表現するかを、アルファベットで入力して送信してもらうという方法を取った。短文 4 つは、拗音や促音等の綴りも含めて確認できる、次の内容である。

- 踏切では一旦停止して、歩行者の邪魔にならないよう充分注意すること。
- 地域の住民たちによる手作り作品が、通路に展示されている。
- 東京ドームには、エキサイトシートというフィールド席がある。
- 東京ディズニーランドのファンティリュージョンは、2001 年に終了した。

3.2 単音に関する調査結果

単音に関しては、「ふ」「じ」「づ」の 3 音について確認した。

「ふ」「じ」については、訓令式の綴りを採用しているか、ヘボン式の綴りを採用しているかに着目した。ヘボン式の方が、タッチタイピングの際に合理的だからである。

3.2.1 「ふ」の場合

「ふ」の場合、短大入学の時点では、32 名（69.6%）が「hu」を採用していたが、前期授業で「fu」の利便性に触れた結果、9 名（19.5%）が打ち方を変更している。一方、入学時に「fu」とタイプしていたにもかかわらず、前期授業終了時に「hu」になった者も 3 名（6.5%）存在するため、一概に便利さを理解して変更した者ばかりではない。入学時に「hu」とタイプしていて、前期終了時もそのまま「hu」とタイプした者は、23 名（50.0%）

いる。

3.2.2 「じ」の場合

「じ」についても、「ふ」と同様に、「じ」という音を表現するにあたって「ji」という綴りの利便性に触れたが、左手小指を使う「zi」から「ji」に変更した者はわずか1名（2.2%）という結果であった。「zi」のまま変更しなかった者は20名（43.5%）であった。

3.2.3 「づ」の場合

「づ」については、綴りそのものを知っているか否かが問題となるが、27名（58.7%）が「du」という特別な綴りを認識しておらず、「zu」と表現していた。その後、「du」という綴りに関して学習したにも関わらず、「zu」を「du」に直せた者は27名中わずか7名であり、20名（43.5%）は「zu」のまま直すことができなかった。

3.3 拗音に関する調査結果

拗音に関しては、「じゃ」「じゅ」「じょ」「ふぁ」「ふぃ」「てぃ」「でぃ」の7音について確認した。

3.3.1 「じゃ」の場合

「じゃ」という音を表現するにあたっては、「zya」よりも、タッチタイピングにおける右手ホームポジションを使える「ja」という綴りの方が楽にタイプできるが、入学時において「ja」と表現していたのはわずか8名（17.4%）であった。最も人数が多かったのは「zya」の18名（39.1%）で、次いで「jya」の17名（37.0%）であった。その後、「ja」という綴りの利便性に振れたにもかかわらず、左手小指を使う「zya」から「ja」に変更した者はわずか1名（2.2%）で、「zya」から「jya」への変更が2名（4.4%）、合わせても3名（6.5%）という少なさである。「jya」から「jya」のまま変更しなかったのは16名（34.8%）、「zya」から「zya」のまま変更しなかった者は15名（32.6%）であった。

ただし、「jixya」を使っていた者は「ja」に、「zixya」を使っていた者は「zya」に、それぞれ変更されている。打鍵数を少なくしようという心掛けの表れであろうが、最初の音をそれぞれ採用しつつの変更であるところに注目しておきたい。なお、「じゅ」「じょ」については、「じゃ」と同様の傾向であった。

3.3.2 「ふぁ」の場合

「ふぁ」は「fa」で表現できるが、「f」を使う綴りはヘボン式となるため、訓令式の綴りが頭に入っている者は「hula」「huxa」などの綴りを選択している可能性がある。

これに関しては、最も効率のいい「fa」を選択していた者が、入学時点で29名（63.0%）、前期終了時点で34名（79.0%）であった。ただし、入学時点で「fa」とタイプできていたにもかかわらず、前期終了時に誤った綴りをタイプした者が3名いた。また、「fula」「hula」などの面倒な綴りを選択していた者は、ほとんどが「fa」と表現できるようになったが、1名のみ「fla」という誤った綴りを覚えていた。また、この音については、これまで見てきた他の音と比較して、「fya」、「ha」、「hua」、「hxa」、「hya」などの誤った綴りの種類が多いことに注目しておきたい。ヘボン式の綴りが頭に入っていないことから、創作されたものが多かったのであろう。なお、「ふぃ」についても「ふぁ」とほぼ同様の傾向であった。

3.3.3 「てぃ」の場合

「てぃ」は、ローマ字入力では「thi」と表現するが、「du」と同様に特殊な綴りであることから、綴りそのものを知っているか否かが問題となる。

傾向としては「ふぃ」に似ているが、「thi」という綴りで入力できた者が、8名（17.4%）しかいなかったことから、8割以上の者がこの音に対する正しい綴りを認識していなかったことが分かる。代替案として「teli」を選択した者が多かったが（13名・28.3%）、「teli」から「thi」に直した者はわずか1名で、「teli」のまま変更しなかった者が13名中10名おり、積極的に綴りを覚えて直していこうという意思が見られない。

なお、「でぃ」についても同様に調査したが、「dhi」という綴りで正しく入力できたものが6名（13.0%）、「deli」が11名（23.9%）など、ほぼ同様の傾向であった。

4. 考察

4.1 調査の結果から

まず、ローマ字の綴りを、小・中学校での学習を基に選択しているということから、一部の音に対する知識が欠落しているのではないかという仮説に対しては、8割以上の者が欠落しているという結果であった。拗音が3音ずつしか学習されていないことによる知識の欠落であると考えられる。そして、綴りを知らないことを、母音の手前に「l」や「x」を付けることによって小文字にすることで補っており、正しい綴りを知った後も、その方法から変更することを積極的にしようとしていないことが明らかになった。

また、タッチタイピングにおいて動かしにくい指を使った綴りから、ホームポジションを使った綴りに変更しようという動きも、積極的には見られなかった。

4.2 ローマ字教育とローマ字入力の間の接点

ローマ字教育とローマ字入力の間には、意外なほどに接点が多くない。拗音が3音ではなく5音必要であることはもちろんのこと、「づ」や「を」などの特殊な綴り、あるいはJISキーボードをタッチタイピングすることを考えて負担のない綴り選びをすることなど、快適に利用することができるようになるために、配慮しなければならないことが数多く存在する。

今後も、学校教育においてJISキーボードによるローマ字入力を採用し続けるのであれば、拗音を5音で表したローマ字対応表を小学校の段階で導入するべきであろうし、同時にタッチタイピングの基本も手ほどきしておくことが、将来のことを考えるとより良い選択なのではないだろうか。

参考文献

小学校国語科の教科書（いずれも平成23（2011）年用）
(1) 光村図書『国語 三 上 わかば』
(2) 学校図書『みんなと学ぶ小学校 国語 三年 上』
(3) 東京書籍『新しい国語 三 上』
(4) 教育出版『ひろがる言葉 小学国語 3 上』
(5) 三省堂『小学生の国語 三年』